

公益財団法人 檜の芽会 御中

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		① 作成日	令和 8 年 5 月 29 日
② 法人・団体名	任意団体 チアアップ彩たま		
③ 団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	〒350-0045 埼玉県川越市南通町 6-13-403		
③ 責任者氏名	浦松晶	(役職名等)	代表
④ 担当者氏名	浦松晶	(役職名等)	代表

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R07-033	⑦助成金額	30 万円	⑧申請カテゴリー	A
⑨奨学活動名	チアアップ彩たま 学習支援教室				
⑩主な実施場所名・ 及びその住所	・ 埼玉りそな銀行 川越支店：川越市脇田本町 8-1 ・ 埼玉県信用金庫 川越支店：川越市脇田本町 22-1				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式 3 - 2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

【活動内容】

●**学習支援活動**—社会的背景を含む、様々な背景を抱える子どもたち（小学校 4 年生～高校生 3 年）に対する、宿題といった日々の学習や高校・大学受験のサポートなどといった「学習支援」を行う教室を実施。毎週土曜日（第 5 週土曜日を除く）に通常教室、夏休みや冬休みといった長期休暇期間に講習会を開催した。また本年度より市内の児童養護施設での学習支援教室も開始。

●**居場所支援**—「学習支援」のみならず、子どもたちにとって「ここなら話を聞いてくれる人がいる」、「自分らしくいられる」と思ってもらえるような空間を軽々する「居場所支援」にも力をいれている。本年度はハロウィーンやクリスマスイベントのほか、「子ども食堂」や「遠足」なども実施

●**活動期間**—令和 2025 年 4 月 1 日～26 年 3 月 31 日

●**開催回数**—47 回（通常教室と講習会の合計）

●**延べ参加者数**—生徒：延べ 458 人、学習支援ボランティア人延べ 532 人

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式 3-2 等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A : 人)	平均時間 (B : 時間)	活動量 (A x B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	258	2	516	
高校生等	200	2	400	
大学生等	0	0	0	
学習支援員等	532	3	1596	
その他	0	0	0	
合 計			2512	

⑬その他の定量的な数値（任意）

協働企業（25 年度）—埼玉りそな銀行、埼玉縣信用金庫、第一コーポレーション

令和7年度伴走型就学・学習支援活動助成 活動報告書

奨学活動名：チアアップ彩たま 学習支援教室

法人・団体名：チアアップ彩たま

作成者 氏名：浦松晶

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

本活動は、経済的・社会的に背景から困難を抱える子どもに対し、学習支援・居場所支援を行うことを目的としている。

川越市内に住む小学4年生から高校3年生までの児童・生徒を主な対象とし、教育格差の是正や学習機会の提供、さらには心の支えとなる居場所づくりを目指して活動を展開している。近年、「子どもの貧困」や教育格差の問題は社会的に大きく取り上げられ、その深刻さが指摘されている。特に、家庭の経済状況や地域格差に起因する学力差は、子どもたちの将来の選択肢を狭める要因となることが懸念されている。このような現状を踏まえ、教育の機会均等を確保し、すべての子どもが安心して学べる環境を提供することが求められている。こうした問題の解決に向けて、「教育と福祉の連携」は不可欠な要素であり、地域社会全体で子どもたちを支える仕組みが求められる。特に、経済的困難を抱える家庭の子どもたちに対する支援は、単なる学習サポートや進学支援にとどまらず、生活環境や養育環境、メンタルヘルスのケアも含めた包括的な取り組みが重要である。地域に根差した支援活動を通じて、行政や福祉機関、教育機関との連携を深め、「切れ目のない支援」を実現することが本団体の重要なミッションの一つとなっている。

2. 実施した奨学活動の詳細

当団体では、毎週土曜日開催の学習支援教室を「埼玉りそな銀行 川越支店」（2024年2月より）にて継続的に実施している。また、学校が長期休業となり家庭内の負担や生活上の不安が顕在化しやすい夏休み等の期間には、「埼玉縣信用金庫 川越支店」にて講習会を開催している。さらに、2025年1月からは隔週で、児童養護施設「埼玉育児院」が運営する母子生活支援施設においても同様の学習支援教室を開始した。

実施内容としては、日々の宿題支援や定期テスト対策、高校・大学受験支援といった「学習支援」に加え、ボランティアとの対話やレクリエーションを通じた「居場所支援」を行っている。生徒1～2名に対しボランティア1名が担当する体制を基本とし、個別性を重視した伴走型支援を実施している。教室には平均して毎回10名程度の子どもが参加している。

支援対象は、経済的困窮世帯やひとり親世帯、不登校など、さまざまな社会的背景を抱える子どもたちであり、中高生を中心に、既卒生や小学4～6年生も対象としている。子ども一人ひとりの状況やニーズを丁寧に把握し、個別性を重視した柔軟な支援を心掛け、学習機会の保障と安心して過ごせる居場所の提供を両立させている。

① 学習支援の継続・拡充

5月より通常教室を開始し、週に1回2時間の教室を実施している。合わせて長期休暇中には平日複数日に夏季講習会および冬季講習会を実施した。年度内には春期講習会も予定している。

本年度は、新たに市内の母子生活支援施設「カーサライラック」において学習支援教室を開設し、支援拠点の拡充を図った。これにより、既存の教室へ通うことが困難な子どもに対しても学習支援を届ける体制を整備した。母子生活支援施設の利用世帯は在所期間が一年未満の短期利用者が半数程度を占めており、退所後は市内で新たに生活基盤を築く世帯も多い。そのため、施設在所中の学習支援にとどまらず、退所後に地域で生活する中で再び学習支援が必要となった際に、当団体の既存教室へ円滑に接続

できる仕組みを構想している。本取り組みは、単年度的な支援提供にとどまらず、子どもの生活環境が変化しても支援が途切れることのないよう、地域の中で継続的に関わり続けられる仕組みを整えていく試みである。

学習支援内容は、宿題支援、定期テスト対策、高校受験・大学受験対策、進路相談、奨学金申請支援（高校在学中および大学進学後）など多岐にわたる。中学生や高校受験生に対しては、地元出身の大学生が学習支援員として関わり、ロールモデル的な関係性が形成されている。活動を継続する中で高校生の参加も増加し、大学進学を志望する生徒も現れており、大学 1・2 年生が中心となって受験支援を担っている。

また、学習機会の提供のみでは教室参加が難しい子どももいることから、居場所機能および体験機会を組み合わせた包括的、総合的な支援を実施している。学習意欲が低い子どもに対しても教室に足を運ぶきっかけをつくるため、学期末レクリエーションや季節イベント、金融教育プログラム等を実施した。これらは単なるイベントではなく、関係性形成および継続参加への導線として機能している。



② 体験機会の提供

また、学習支援に加え、クラシックコンサート遠足や季節イベント、食育活動等の体験機会を提供した。特に夏休みに実施した都内音楽ホールでのクラシックコンサート鑑賞は、保護者・生徒・ボランティア約 30 名が参加し、文化芸術へのアクセス機会を保障する取り組みとなった。教室外での共同体験は、子ども同士およびボランティアとの関係性を深め、学習意欲向上にも寄与した。

また、おにぎりづくりや餅つき等の食体験活動も実施した。これらは食育的側面のみならず、子ども同士・大学生とのコミュニケーションを促進する重要な機会となっている。食を媒介とすることで、学習以外の側面からも関係構築が進んだ。



③ 行政・企業等との連携

本年度は、市社会福祉審議会および県児童福祉審議会の公募委員として参画し、日々の現場実践から得られた知見を政策議論へ還元する機会を得た。また、審議会を通じて関係機関との接点生まれ、他機関連携が具体的に進展した。

また、県主催「こどもの居場所フェア埼玉」や県弁護士会主催イベント、埼玉りそな銀行主催地域連携フォーラム等で登壇し、県・市・企業との連携の機会が拡大した。これにより、地域内でのネットワーク形成および社会的認知が進んだ。



④ 大学との連携および担い手育成

立教大学にてボランティア説明会を実施し、新たな担い手の確保に努めた。加えて、社会学「NPO・ボランティア論」、公共哲学の分野で「まちづくり」に関する講義等に登壇し、研究者的視点と実践を往還する機会を得た。

大学との接続は、研究者からの助言を得ると同時に活動の社会的意義の言語化の機会をいただき、また、ボランティア人材の確保や育成の両面で重要な基盤となっている。



3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

本年度は、学習支援の継続実施に加え、新拠点の開設や支援対象の広がりを通じて、活動の質的・量的発展を実感した一年であった。特に母子生活支援施設「カーサライラック」での教室開設は、従来の教室に通うことが難しい子どもへの支援を可能にし、支援の裾野を広げる契機となった。また、施設在所中から退所後の地域生活へとつながる視点を持つことで、子どもの生活環境の変化に応じた継続的支援のあり方を具体的に構想することができた。

学習支援の面では、高校生の参加が増加し、大学進学を志望する生徒への受験支援や奨学金申請支援を実施するなど、支援内容の高度化が進んだ。地元出身の大学生や大学1・2年生が中心となって中高生を支える構図が定着し、ロールモデルとしての関係性が生まれている点も大きな成果である。

さらに、市社会福祉審議会および県児童福祉審議会への参画、各種フォーラムやイベントへの登壇を通じて、現場の実践知を政策や地域社会へ還元する機会を得た。これにより、他機関との具体的連携が進展し、地域内ネットワークが拡充したことは、団体の持続性の観点からも重要な前進であった。

一方で、活動規模の拡大に伴い、運営体制の強化と役割分担の明確化が課題として浮かび上がった。大学生ボランティアは安定的に確保できているものの、卒業・就職による離脱は避けられず、継続的な担い手育成と組織的な知見の蓄積が必要である。

今後は、拠点間の連携を強化し、子どもがどの場所においても支援が途切れない体制を整えるとともに、ボランティア育成の仕組みを体系化していく。また、行政・企業・大学との連携を深化させながら、地域に根ざした持続可能な学習支援モデルの確立を目指す。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

初期から継続して参加している生徒の一人が、本年度ついに大学受験生となった。3年間にわたり毎週末ともに学習を重ね、努力を積み重ねてきた姿を見てきたからこそ、現在受験の真ただ中にいる彼

女が、自ら選んだ進路を実現してほしいと心から願っている。学習支援は時間をかけて伴走する中でこそ、子どもの変化や成長を実感できることを改めて感じた。

一方で、進学か就職かで進路に迷う生徒もいる。意欲が高まる時期もあれば、不安や現実的な制約に直面し、将来を描くことが難しくなる時期もある。その背景には、これまでの経験によって積み重なってきた「あきらめ」や「自分には無理だ」という無力感が存在している場合も少なくない。進路選択の場面では、学力だけでなく、家庭の経済状況や生活環境も大きく影響する。

学習を支援する中で、金銭的・状況的な困難に直面する子どもと向き合う場面もあった。そのたびに、単に勉強を教えるだけではなく、奨学金制度の情報提供や申請支援、具体的な選択肢の提示など、より包括的な支援の必要性を痛感している。

長く積み重なった無力感を少しずつほぐし、「やってみたい」「挑戦してみよう」と思える気持ちを育むことこそが、伴走型支援の本質であると感じている。迷いや不安の中にいる子どもが、再び前を向けるように、そしてどのような選択をしても自らの可能性を信じられるように、引き続き「チアアップ」する存在であり続けたい。